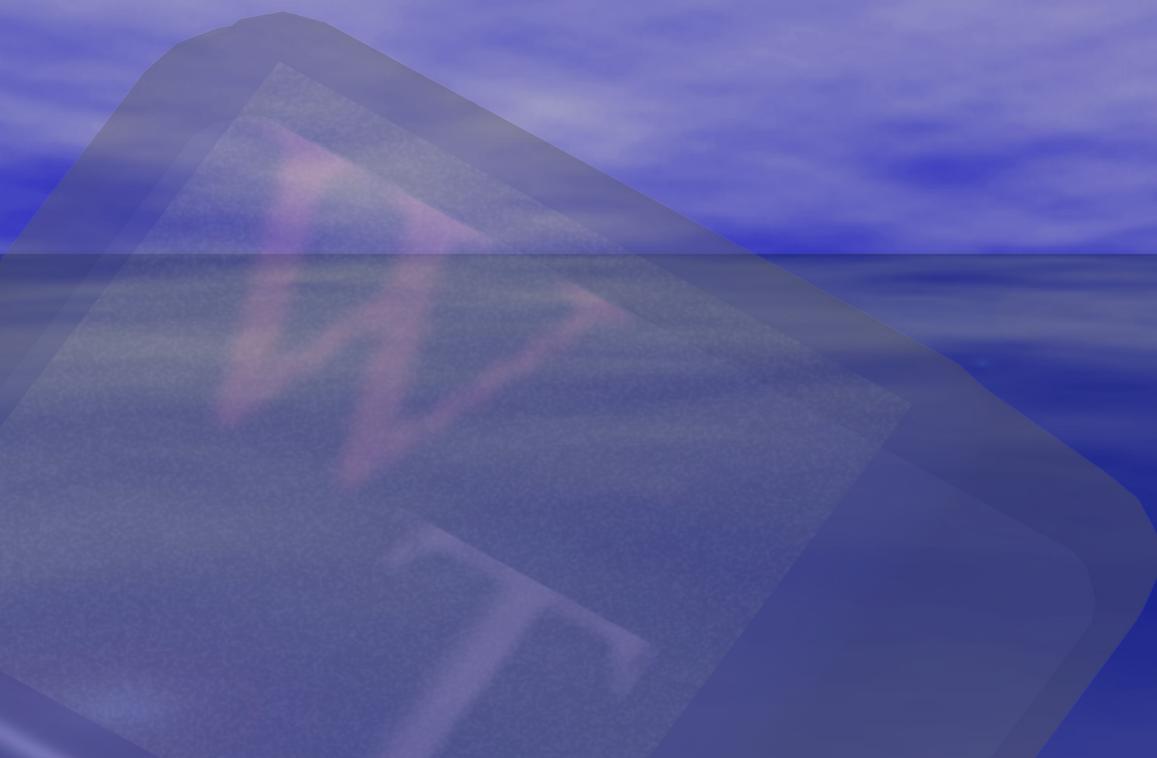


# タイピングソフトの作り方

Denasu System



## 2.4 消しゴムの導入

ここまでの説明で、タイピングソフトを作るために必須となる、仕様書の書き方を学んできた。仕様書を書くために、紙と呼ばれる四角いペラペラした物体に、鉛筆と呼ばれる木の筒に黒い粉を充填した物体で文字を書くという技術を学んだ。紙を固定する机、紙を捨てるゴミ箱の使い方、鉛筆を削る鉛筆削りなどの技術も学んできた。読者の皆さんはここまでのいろいろな技術を学び、タイピングソフトを作るための自信を持ってきた頃だと思う。しかし、油断してはいけない。タイピングソフトを作るためにはまだまだ超えなければならない壁があるのだ。

ここまで、鉛筆は紙に文字を書くための魔法のデバイスであるという説明をしてきたが、一つだけ致命的な欠点があることを注意しておこう。実は、鉛筆で一度黒い粉を紙に塗ってしまうと、紙から剥離させることは困難なのである。努力家の読者は、指で一粒一粒拾っていけばよいと考えるかも知れない。しかし、実際にやってみると紙が黒くなり、さらに取り返しのつかない状態になってしまうのだ。ではどうしたらあなたの書いたすばらしい文章をもっとすばらしい文章に変えることができるのか。答えは消しゴムにある。

### 2.4.1 前書き

ここまで、読者の皆さんは実際に紙に文字を書いてみて、素晴らしいタイピングソフトの第一歩を踏み出したことだろう。しかし、うまくいっただろうか。間違った文字を書いてしまったり、字の形が歪んでいて、修正しなくなったりはしなかっただろうか。そのような経験をしなかったし今後もしないという完璧な読者はこの章をとばしてもらって構わない。しかし、ちょっと不安が残るという謙虚な読者は「消しゴム」の使用を検討してみるとよいだろう。

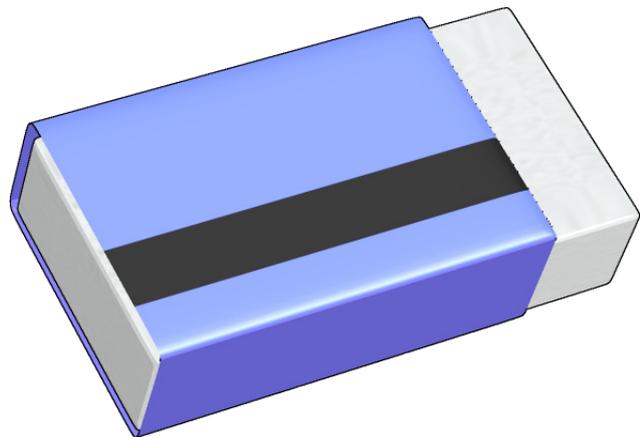


図 4-1. 一般的な消しゴムの形状

### 2.4.2 消しゴムとは

まず図 4-1 を見ていただこう。これが一般的に消しゴムと呼ばれるものである。プラスチックや紙などでできた「ケース」に、柔らかくて弾力のあるゴム製の「本体」が収まっている。このうち、文字を消すのに使う部分は本体の部分であり、ケースの部分は基本的には使わない。ではなぜケースが付いているのかというと、恐らくゴムの部分が汚れていたときに手が汚れないようにするためと、手が汚れていた場合にゴムを汚さないためであろう。実に配慮が行き届いた製品であるといえる。図 4-1 に挙げたものは一般的な形状と材質だが、これ以外にも何かの形状をかたどった消しゴムや、非常に柔らかく変形できるものなど、様々な消しゴムがある。他の人が自分とは違う消しゴムを使っているからといって、驚かず、同じ消しゴムであることを認めるようにして欲しい。

「消しゴム」という名が示しているように、この装置は主に鉛筆で書かれた文字や図形などを消すものである。文字を多く書く読者の方には非常に有用だろう。例えば、タイピングソフトの仕様書を書く際、ソフトのタイトルを間違えて書いてしまった場合、もし修正することができなかったとしたら、最終的にあなたのソフトは海に潜るための必須ソフトとして賞賛されてしまうこともあるだろう。このような時、消しゴムがあればトラブルを回避できることは言うまでもない。このように、消しゴムは仕様書作成に必須であり、とても便利なものなのだ。次節からは具体的

な使用方法について語ろう。

### 2.4.3 使用方法

ここで消しゴムを実際に使ってみよう。実際に手元に消しゴムがある読者は消しゴムを取り出していただきたい。ビニールなどで包まれてある場合はそれをはがしておいていただきたい。消しゴムを普通に使うのは非常に簡単である。ペンと同じように持ち、(日本人の方は箸を持つようにするとうまく持てるだろう。)紙に鉛筆で書かれた、修正したい箇所に押し付けながらゆっくり1方向、あるいは往復させながらこすり付ければいいだけだ。しかし実際に試してみた読者の多くは、思った程簡単にはいかないことにいらだちを覚えたことだろう。修正したくない部分まで消えてしまったり、紙がちぎれてしまった読者もいるだろう。しかし心配する必要はない。ほんの数時間も練習すれば思い通りの動作を消しゴムにさせることができるようになるだろう。うまく使えなくても決してあきらめないことである。この困難を乗り越えれば、間違いを気にせず仕様書を書けるという素晴らしい未来が必ず待っているのだから。

さてここでもう1度消した部分をよく見てほしい。恐らく、黒い小さな粉のようなものが紙についていることだろう。これは決して異常ではないので慌てないでほしい。この粉は消しゴムを使用する時には必ず出てくるもので、「けしカス」という。これを利用して丸めてみる、集めてみるなどの行為をするようになれば消しゴムに関しては一人前、とも言えるほど重要なものなのだ。また、このけしカスは消しゴムの本体が削れてできたものであるので、文字を消す度にゴムの部分がすり減っていく。ある程度すり減ると、ケースの部分が邪魔になることもあるだろう。この場合は、消しゴムを買い換えてはいけない。

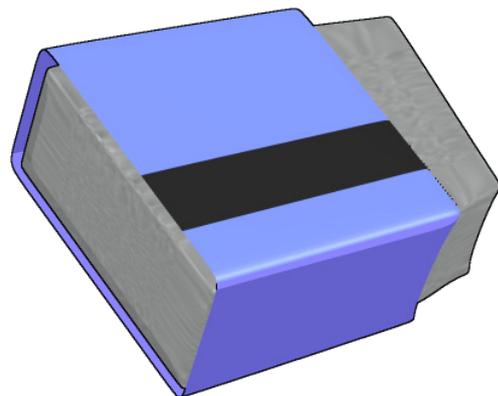


図 4-2. 使い込んだ消しゴム

我らの地球を救うために、ケースを折りたたんだり、切ったりして丁度良い形に変えるようにして欲しい。なお、ケースを切る場合、手でちぎることもできるが、本書2巻で説明する「カッター」を使うとより綺麗に切ることもできるため、綺麗な切り口が好きな読者はカッターの使用も考慮してみるとよいだろう。なお、消しゴムはどこまで小さくなったら買い換えるかというのはいつでも議論の対象となり筆者の経験上結論は出ていない。あなたの手収まらなくなってきたら買い換えも検討しよう。

さて、今日初めて消しゴムを使った読者は、真新しい消しゴムと共に未来を馳せていることと思う。しかし、使い込んだ消しゴムは図4-2のように、汚くいびつになっていく。それでも、この汚さはあなたがどれだけ仕様書を書いたかを表す鏡のようなものとして、より愛着をもって使って欲しい。

### 2.4.4. 消しゴムとともに

駆け足で説明してきたがどうだろうか。本書は消しゴムの専門書ではないため最低限必要な説明をしてきたが、消しゴムのエキスパートとはいかないまでも、消しゴムへの自信は生まれたことだろう。しかし、消しゴムは奥が深いものである。これからは、読者の1人1人が消しゴムとなったつもりでがんばっていただきたい。家に帰るまでが消しゴムである。さらに消しゴムをマスターしたい読者は、消しゴムの専門書を2~3冊読むことをお勧めする。

次の章では、ここで学んだ技術を元に、タイピングソフトの仕様書を書くためのより専門的な技術を解説していく。そこでは、仕様書をまとめていくために穴開けパンチと綴じ紐の使い方を学ぶことになるだろう。